『当世書生気質』にみる明治十年代の学生の“憧れ”と“不安”
―「江戸」の空間を彷徨する上京インテリ学生たち―

Analysis of the student culture in Syoyo Tubouchi's novel
"Toseishoseikatagi" at the Meiji era.

井　上　好　人
Yoshito INOUE

〈要旨〉

明治十年代の半ば，「学生」たちが自らのアイデンティティを模索していく時代の幕開けにあって，エリートの卵としての彼らのメンタリティは，どのような変化の兆しが現れたのであろうか。小論は，坪内逍遙の小説『当世書生気質』を題材に，同作品に登場する学生たちの交友関係や行動エリア，言葉遣い，会話の特徴から，彼らが互いにどのような世界観を共有していたのかについて考察した。そこには，「極楽トンボ」で風流と遊楽の空間を彷徨い，諧謔の世界を楽しむ学生たちの姿が，いささか戯画的に描かれているとはいえ，あるいは現実生活で取り結んでいた重層的な関係が半ば意図的に伏せられているとはいえ，学歴エリートとしての「同輩集団（peer group）」の絆を取り結んでいこうとするオルタナティブ（alternative）な学生像が示されていた。その学生像は，交友関係を通して己の世界の殻から脱し，可能性を広げていこうとする精神をもっている反面，彼我との軋轢やジレンマに悩む弱い人間でもあり，同小説は，新しい学生像の行方を彼らが模索し葛藤する心象風景を映し出している。

<キーワード>
立身出世，学生文化，近代小説

1.　はじめに

「学生」が巷にあふれ始め，文明開化を彩るひとつの新奇な出来事として注目を浴びるようになったのは，明治十年代の半ば，東京でのことである。「兵児帯に一刀を挟み，高下駄をはいて市中を横行する」（竹越与三郎『磯野計君伝』）といった武士的な気風は薄れつつあり，『それから』の「代助」のような，旧藩時代の父や叔父の刃傷沙汰を聞いて「腥ぐさい臭が鼻柱を抜け」，「勇ましいと云う気持ちよりも，まず怖い方が先に立つ」感性が芽生えようとしていた。「学生」たちが自らのアイデンティティを模索していく時代の幕開けである。

エリートの卵としてのメンタリティに，変化の兆しが現れるこの過渡期にあって，彼らは何を考え，どのような生活を送っていたのだろうか。学問を媒介としてエリート意識を共有する彼らは，下宿や街中で何を語らい，どのような絆を取り結んでいたのだろうか。このような問題意識のもと，小論は，坪内逍遙の小説『当世書生気質』（以下，『書生気質』）を題材に，同作品に登場する学生たちの交友関係や行動エリア，言葉遣い，会話の特徴から，彼らが互いにどのような世界観を共有していたのかについて考察するものである。

『書生気質』は，坪内が「学士」の称号を伏して「春廼舎朧」のペンネームで，1885（明治18）年から1886（同19）年にかけて全17巻の和装本で出版した小説である。江戸情緒の色濃く残る明治十五年頃の東京の「世態風俗」を背景に，さる「私塾」の書生の風俗を描いたとされる[注1]。モデルは，坪内が在学中の東京大学学生である。出版当初，遊蕩する惰弱な書生を描くとは鄙猥卑俗で文学士の著作とも思われない，との批判が寄せられたにも関わらず，学生やインテリ層を中心に熱狂的に読まれベストセラーになった。

なぜ，読者たちはこの作品の虜になったのだろうか。理由の一つは，彼らの間に江戸期の戯作文芸が流行していたためである。『八犬伝』の一節など暗誦できないと「友人間に何となく肩身が狭く感ぜられた」（市島春城「明治文学初期の追憶」）という。だが，これだけならヒットの理

由としては不足だろう。おそらく，インテリ向けの「羅ーマンス」としてのストーリーと江戸戯作＋開化風俗＋西洋文学という作品構成が，読み手のリアリティに共鳴し，彼らの潜在的な嗜好や願望を掘り起こしたからではないだろうか。小論は，そういう読者も含め，登場人物たちの教養や感性を当時の社会的文脈から解釈しながら，同時代の学生たちの“憧れ”や“不安”も含めた現実感に迫りたい。

井上（2002）においては，学生の「身体」という観点から,「花暦講」的な風流遊びから近代西洋的なアスレチック・スポーツへの移行の過渡期として同時代を捉え，彼らの身体の鍛錬に関する態度，情欲に対する身の処し方をめぐる葛藤の構図を析出した。小論では，彼らの「生態」から世界観や現実感の取り結び方についてみようとするものである。

2.　文明開化の喧噪の中での“不安”

作品の概略を述べておこう。物語は,春の飛鳥山での「物いふ花を見る書生の運動会」から始まる。江戸期の桜の名所として，また滝亭鯉丈の滑稽本『花暦八笑人』の茶番狂言でも知られた飛鳥山である。『八笑人』との関係は，作品が戯作としての『遊学八少年』の構想を下敷きにしていたことからも窺える。さて,「物いふ花」とは，桜花に芸妓を掛けているのだが，書生・[小町田］と芸妓・[田の次］の「ロ（羅）ーマンス」をも予告している。[小町田］は，学才もあり品行方正,生まれつき「感じ易き性質」の書生，そして，［田の次］は下谷数寄屋町の柳村屋の芸妓（本名：お芳)。二人の恋愛にまつわる［小町田］の葛藤が，彼の心理＝「架空癖」と書生たちの生態を通して描かれ，［田の次］が上野戦争で生き別れになった父と兄（[守山］父子）と再会を果たす大団円にむけてストーリーが展開される。

このように,『書生気質』は，江戸期の人情本を思わせる恋物語のスタイルを踏襲し，維新の開花風俗を滑稽本的に風刺し，そして心理描写という「性情を主とする西洋小説の趣味」(『早稲田文学』第21号，1896年）を練り込んだ小説である。文学史的にいえば，江戸戯作の世界を近代的な小説へ転換させようとする試みにおいて評価される作品である。他方，この“異質なスタイルの混交”という作風は，コミカルな語り口の中に，時代の転換点に遭遇した人間たちの行動や考え方の混乱，中途半端さを浮き立たせ，その結果，当時の学生たちの置かれていた社会的状況や彼らの世界観を表象することに成功している。

それでは，まず背景となる明治十年代の東京がどのように描かれているのか，開花風俗や新奇なアイテムがこの背景にどのように収められているのか，そして，登場人物たちがこれら背景やアイテムをどのような意味のあるものとして捉えているのか，について分析してみよう。

次の例は，向島の料理屋で会食をして帰宅しようと［小町田］が酔いどれて，違った人力車に乗り込み，吉原の引手茶屋に引き込まれてしまう場面（「吉原の珍事」）である。彼はこの夜，［田の次］と茶屋で一夜を明かし，翌日，校長に呼ばれることになる。

はや吾妻橋もうち渡り，浅草前ぞと思はるゝに，車は下谷に向はずして，北の方へと向ふに似たれば，小町田祭爾は審りつゝ，ひそかに桐油を掲あげて，あたりをしば～見廻せども，文目もわかぬ暗の夜なれば，こゝを何處としるよしなけれど，如何にも様子が變なる……（中略）……聲ふりしぼりて，しきりに車夫をとゞむれども，耳にもかけずかけ行く程に，いつしか幾町も通りすぎて，いと寂しげなる巷にいでぬ。アナ心得ず，ト小町田祭爾は，あたりを屡々見廻せども，四方真暗にてわけわからず，暫らくあつて何とやらん，いと賑やかなる巷に出ぬ。ふたゝび桐油を掲げあげて，右と左をかへり見るに，弦歌さながら沸くが如く，太鼓鼓（たいこつゞみ）の音がまびすしく，晝をあざむく球燈（ちやうちん）は，雨にも散らぬ夜の花。花の巷の吉原とは，此時はじめて悟るものから（略)。

江戸の行楽地・向島から浅草へ，人力車が隅田川を渡るのは当時まだ木橋であった吾妻橋である。吾妻橋が，鉄橋に瓦斯灯という設えで模様替えし，近代都市の名所として行楽客を集めるのは明治二十年以降のことである。薄暗い橋を渡って，川沿いに北に進む道中は夜の田圃。しばらくして，闇夜は一転，桃燈が明るく照らし太鼓が響く花の吉原へ。粋なこの演出は，人力車の暴走が［小町田］の不安な心を加速し，先の読めない心の闇を伝える効果も醸し出している。

次は，牛肉屋で飲食したあと，夜遅くまで寄席見物をしていた［須河］「宮賀」「任那」の三人が，懐中時計の止まってしまっていることに気がつき，慌てるシーンである。

(須)「ヤ，いかん～，時計はドンタクぢや。」(任)「然だらうヨ。先刻の上野の鐘が，十時らしいもの。」(宮)「そりや大変だ。帰らう～。」・・・・・・（須)「宮賀，いかんぞ。もう門を閉めてしまうたに相違ないぞ。」(宮)「いかないネエ。それだから僕は,寄席へゆくまいと思つたものを。」(須)「それを今いうたとて，死子の年ぢや。好何せうなア。」(宮)「如何しようだッて,仕方がないぢやアないか。マア，学校までいつて見よう。」ト両人は直走に，駿河臺の方へ向ひて，駈出せしが，(略)。

寄宿舎の門限は十時である。門の出入りのために許可書

である「門鑑」を提示しなければならず，密かな遅刻は，板塀を乗り越えて寮舎へ入る荒技を必要とする。それを捕まえようと待ちかまえる寮生もいて時としてトラブルになるので，外出時には門限に気を遣わなくてはならない（例えば，「今帰るところだが，尚門限は大丈夫かネエ」と尋ねる［宮賀］に対して，「我輩の時計ではまだ十分位あるから」と答える［須河］）。太陽暦への改暦は1872（明治5）年12月のことであり，和時計に取って代わった西洋時計は，社会に秩序をもたらす利器として歓迎される一方，分刻みで表示される装置は人々の行動を管理することになった。また，ウォッチは高価な装飾品として官吏や富裕な商売人たちの憧れであり，［須河］の「懐中時計」は片側ガラスの銀時計で，贅沢をして8円（現在の物価感覚で約7万円程度か[注2]で買ったものだが，ドル安になった今，高々4円内外の「廉物」になってしまっている。「ウォッチ」の普及率は，明治20年で総人口あたり0.8％であったから[注3]，希少価値は喧伝されるほどではなくなっていた。経済と物流のグローバル化は，［須河］に価値の変動リスクを背負い込ませ，夢と後悔を同時に味わわせることになったのである。

さて，大慌てに神田淡路町の横町から小川町通へ出ようとした彼ら，俗にいう「矢場横町」の「人素三分化素七分の，白首連の巣窟」へ迷い込んでしまう。

> （娘）「素通はなりませんヨ。」トいひもあへず，宮賀の袖を引留むれば，宮賀は吃驚狼狽して，振拂ひつゝ逃出す。此方の須河も仰天して走りぬけんとする間もなく，向ひの店より駈けいでたる，二十あまりの一個の女が，たちまち緊乎（しっか）と抱とめつゝ，はや店先へ引立れば，宮賀はいよ～～驚きつゝ，抱とめられては叶ふまじと，須河を打捨て逃出すを，追すがりたる一個（ひとり）の小娘。「お待なさいヨ。」の聲もろとも，又もや袖をとりむるを，離せといへども離さばこそ，宮賀は益々狼狽して，引きつ引かれつ，挑みあふ。

「矢場」とは揚弓場。「店番，矢拾ひなど皆粉頭の女子にして，（所謂矢場女）媚を売ること，恰も名酒店の如し。さればこれに遊ぶものも，専ら職人風情の下劣なるもののみにして，寧ろこれを狎戯するを楽みとして遊べば，旨はカチンドンの響きの外にあるなり」と『東京風俗誌』が述べるように，裏風俗として，浅草公園や芝明神前にも軒を連ねていた。［宮賀］は窮地を脱するが，［須河］は小娘に「懐中時計」を取られ店にあがりこむはめになる。小娘の名は［お豊］，十四五の年頃，「こまつしやくれた質」で容色も悪くない，お転婆で活発な性格も彼の気に入るところとなる。「むゝ，又来るぞ」と言い残して出て行く。これをきっかけとした，彼の淡い恋心は，駒込の温泉宿での逢引き計画へと発展していくが成就しない。

このように，全編を彩るのは，江戸情緒の面影残る町並み，路地の喧噪，これに対する郊外の物寂しく薄暗い風景の対比である。牛肉店，理髪店，汁粉屋，本屋，寄席，矢場といった店舗も，この景観の中に埋め込まれ，市井の雑踏や郊外の田舎道をさまよい歩く者の皮膚感覚と視線から描かれる。このような感覚をもたらす景観的な事情として，当時，本郷から神田，神保町，小川町，浅草界隈には，ニコライ堂や浅草十二階などの高い建造物が未だ現れていなかったことがあげられる。「九段坂ヨリニコライ遠望」（明治石版画）が，パノラマ的な視角の代表として東京名所のひとつとなり，芸妓に浅草十二階といった構図（石版画「東京名所浅草公園　吉原芸妓冨次」（有山定次郎作）がもて囃されるのは，明治二十三～四年以降のことである。これゆえ，この小説の住人たちは，「十九世紀的な都市の神話がつくりだした空間知覚」（前田，2006，96頁）としての「俯瞰する眼差し」をまだ知らない。

では，すでにあった銀座の煉瓦街やガス灯，鉄道や馬車鉄道などが描かれない理由は何だったのか。銀座は地理的にも少し離れており，学生の頻繁に出かける場ではなかったかもしれない。だが一方で，浅草や向島，亀戸天神などの江戸期の行楽地には，書生たちは「遊歩」にかこつけて好んで足を運んでいる。つまり，開化風俗は，江戸の風流や色事の世界に準拠する態度によって相対化され，彼らの目と耳を中心に，関心の程度に応じて取り上げられているからである。仮名垣魯文は横浜の瓦斯灯に接して「日の丸の光りや添ハむ立ちのぼる　ガスのけむりの高きいさをに」と詠んだが，『書生気質』の住人たちには，文明を象徴する高い建築物や設えには関心を示さないか，あるいはこれらに気分の高揚をみない。人力車や時計などの新奇なアイテムも，便利さや快適さというよりも，動揺や混乱をもたらすものとして表象され，彼らの漠然とした不安や将来の見通しの不確かさを暗示する。開化風俗は，「浮ついた極楽とんぼ」的な学生生活に彩りを添えはするが，多くの場合，戯作世界のユーモアと駄洒落のネタとして取り上げられ，“オチ”がつけられるのである。

例えば，「ナイフはナイフぢや」は，ナイフは無いの洒落，「俄に心が替つたから，こゝへ登楼と進化した」と吉原登楼の言い訳には社会進化論が持ち出される。秀逸な例は，代言人の［吉住］が，恋敵である［小町田］の所業を非難して，「放蕩卒業の証書（サーチフヒケイト）と，マスタア色男の爵位を以て，学者の尊号に交換するたア，感々服々土瓶の煮音，蒸気の沙汰とはいはれない」（「蒸気」＝正気）と怒りを発散させる場面であろう。地の文も同じノリで，「官海に電信すくなからねば」と，「電信」を「縁故」にな

ぞらえ，「老いゆくまゝに権門貴紳の，愛顧をえれきの引力さへ，次第々々に薄らぎけん」と，縁故関係を「愛顧をえれき」＝“得る”と“エレキ”に掛けて表現している。

このように，文明開化の風俗やアイテムは，一旦，書生たちの生活世界へ引き込まれ，彼らの置かれている状況―多くは不測の事態，そして恋愛・色欲と学業との関係で悩む不安や葛藤―を的確に表現するツールとして多くの場合，用いられているのである。

3.　シェークスピアを引用する「書生」たち ～得意な英語，苦手な和漢学～

次に，“会話”に着目し，彼らの教養の程度と特徴を捉えてみよう。

「書生」たちの会話は，彼らが江戸の滑稽本や歌舞伎・浄瑠璃の蘊蓄とユーモアの世界を共有して，開化風俗を手玉にとるだけでなく，あるときはシェークスピアを引用し，またスペンサーの社会学やペインの心理学を借りて議論するなど，西洋の文学や学問にも造詣が深いことにその特徴がある。高田早苗が「英語を交へられたるは時節柄頗る好き御考案」（高田「当世書生気質の批評」）と指摘するように，リズミカルなイディオムが学生言葉の中に巧みに練り込まれ，江戸と西洋2つの対照的な世界を違和感なく接ぎ木している。

まずは，その見事な引用芸と言語感覚を味わってみよう。次の例は，［田の次］との交際を告白する［小町田］が，聞き役の［守山］に対して，冤罪を雪ぎ悔心を表明するために打ち明ける真実には「先入の僻見」なしに聞いて欲しいと懇願する場面である。

［守］「そんな御心配は無用だ。酌量減刑は僕の手に有サ。大丈夫だよ，公平な判決をするから)。」，［小］「いよウ判事さま」，［守］「青砥藤綱さまア」（『人肉質入裁判』と云ふ院本の中の語。）が聞て惘れらア。サア～始む可し始むべし。」

ここでは，［守山］が弁護士を開いたことに掛けて，『ヴェニスの商人』でのシャイロックの台詞（「名判官ダニエル様の再来だ，まったくだ，ダニエル様だ!」）が引用されている。「ダニエル」に「青砥藤綱」が重ねられる面白さは，旧約外典に登場する裁判の守護聖人と，歌舞伎（「青砥稿花紅彩画」）で有名な鎌倉時代の公正剛直の判官の両方の知識がないと理解できない。

次は，［小町田］が志を貫くために，［田の次］との交際を断念しようとして，彼女からの手紙にも返事を出していないことを［倉瀬］に吐く場面である。

［小］「今尚ああいつてよこすものゝ，Frailty, the name is woman.（脆きは女子の心かな）さ。頼になるものぢやアないヨ。……僕不肖なりと雖も，年来私に志を立ててto be something（有為の人たらん）と盟つたからには，豈一人の女子の為に終身の業を誤らんやだ。」

『ハムレット』の名台詞からの引用である。このほか，取り上げられる人物は多士済々で，「バイロン得意の天とは，此般風景をいふンだらう」と，ロンドン社交界で貴婦人を虜にした美貌の詩人・バイロン（1788-1824）をはじめ，クロムウェル（1599-1658），ミラボウ（1749-1791），ビスマルク（1815-1898），ピット（1759-1806）といった政治家までいる。痴話話や喧嘩の場面でも，西洋文学や学問，流行語がテンポ良く折り込まれ，鮮やかで不思議な魅力を奏でている。「放蕩連の領袖」として，絹の袴に駒下駄をめかしこんで歩く［継原］は，美人の喩えとして，弁天様とスコットランド女王を持ち出し，「よしんば弁天さまを見たからッても，メレイ・スチュアルト（蘇国の美しい女王）に惚られたからッても，河童のフハアトとも思やアしないヨ」（「フハアト」＝屁）と見栄を張る。こういう痴話もウィットと愛嬌のオブラードで包まれ，野暮ったい欲望の表出を免れている。

地の文でも，西洋学問に依拠した文明批評や日本人論が展開され，時事評論として魅力がある（注4）。時のトピックやキーワードを小説という手軽な体裁の中に散りばめながら，現代の新書版教養書のような機能を持たせたことが，読者としてインテリ層およびその予備軍を惹き込んだ秘訣だった。坪内は自身を「暢気な現実主義者」と自嘲する。あるときは「開明の眼」をもった啓蒙的な視点から，またあるときは欧化主義の世相を皮肉る伝統主義者の視点から展開される批評は，当時の書生社会の（というより，坪内グループの）論理と倫理をうまく代弁しているだろう。学生たちは，このような知識と教養を隠語的に共有しながら，互いの絆を深めあっているのである。

さて，会話体の漢字に英語カタカナのルビが多用されているように，『書生気質』の学生たちの英語力には目を見張る一方で，漢籍や仏典からの引用はほとんどみられない。この点から，同時代の漢文を共通の素養とし，頼山陽の詩賦を吟じ剣舞を舞う「壮士」連とは，教養やハビトゥスを異にしていることが窺える。彼らの言葉に対する感性は，どのように培われたのだろうか。

まず，世代論的な説明が可能だろう。彼らは，少年期に，儒学から英学への転換を余儀なくされた世代である。明治維新に少年期をむかえた彼らは，漢籍や国書を十分深めないまま英学私塾の門を叩き，あるいは旧藩ゆかりの洋学校に入学している。岡倉天心（1863年生，横浜）は父の教育

方針により，7歳の頃から，習字や四書五経は学ばず，外国人居留地にあったジェイムズ・バラ塾（横浜）に通った。彼が漢籍の手ほどきを受けるのは，父親が再婚した時に預けられた寺の住職によってである。県境の標柱が読めず，「これでは日本人ではない」と父親が心配したからである（岡倉一雄『父天心を繞る人々』）。彼が，大学在学中のフェノロサとの交遊のきっかけに，文部省官吏として東京美術学校設立への道を開くことになったのは，彼の絵心と詩作の趣味のおかげである。ところが，この趣味は，在学中に南宋画の奥原晴湖に弟子入りし，また森春濤の漢詩塾・茉莉吟社に参加して磨かれたものである。

9歳で維新を迎えた三宅雪嶺（1860年生，金沢）は，7歳から漢学と習字の私塾に通っていたが，幕末の混乱期でそれ以前の世代ほど督励されず，11歳で藩の仏学英学学校へ通うようになった。

また，江戸っ子で，「八犬伝」や「三国志」を愛読，習字の師匠のところへ通っていた高田早苗（1860年生，東京）に英学を勧めたのは，官吏をしていた母方の叔父（農商務省工務局長）である。旧幕時代に洋行し，岩倉使節団へも同行したというこの叔父の宅に寄寓し，共立学校（設立者：佐野鼎，現：開成高校）に通うようになったのが彼の英学事始めであった。

東京では，共立学校などの英学塾は，明治6～7年頃に全盛を極めた。当時，英学塾が漢学塾の2倍あり，150もの塾で六千人近い生徒が外国語を学んでいた[注5]。英学全盛の背景に，1873（明治6）年5月，東京開成学校の専門学科教授用語が英語と定められ，翌年には東京外国語学校の英語科が分離され東京英語学校に，同時に愛知・大阪・広島・長崎・新潟・宮城の各外国語学校が各英語学校と改められるなど，英語が公用外国語として認められた事情がある[注6]。地方（石川県）でもこの情報によって，県が設立した英仏学校で「仏語をやめる生徒が続出」（『石川県教育史　第一巻』161頁）したくらいである。

このように同世代は英語には堪能であっても，必ずしも和漢学に造詣が深かったわけではなく，むしろ苦手であった。横地石太郎（1860年生，金沢。山口高等商業学校長）が次のように証言している。

> 従来の開成学校の生徒中には殆ど国書の素養なきものあり手紙すらも英文でなければ書けぬ位の者もあつたので『本科生と雖とも試験の上国書力の足らざる者は予備門にて国書を履修せよ』と命ぜられたので一時は大に恐慌を来し将に本科を卒業せんとする者でも予備門生と席を同ふして国書を履修したものも少くなかつた。現に堂々たる体躯の持主で本科上級にあり後年総理大臣にまで経昇りし仁が其当時日本外史を掲げて廊下を予備門の教室へと急いで居つたのを記憶する。実に奇観であつた。（『加越能郷友会々報』16号，昭和3年3月）

「後年総理大臣にまで経昇りし仁」とは加藤高明（1860-1926）のことだろう。尾張佐屋の代官手代の次男として生まれ，愛知英語学校で坪内とも同窓であった彼は，大学法科を，1881（明治14）年，首席卒業している。これらのエピソードは，当時のエリートたちの言語力を，学歴論としても解釈できることを示している。すなわち，開成学校（大学予備門）の入試選抜の特性である。明治8年，同校が初めて実施した入試は，国書文章のほかは，英語，英文典，地理（東西両半球），数学，歴史（万国史大意）であった。約3倍の競争をくぐり抜けた合格者（38名）の多く（29名）は，東京英語学校の卒業生（13歳の岡倉天心が含まれる）によって占められていた（『東京大学百年史　通史一』302頁）。つまり，合格のためには英語の語学力をはじめ地理や数学含むトータルな洋学のスキルが必須であり，そのスキルは官立英語学校に在籍した者が優位に習得していたという事実に注目しておこう。坪内グループも例外ではない（大阪英語学校：有賀長雄，山田喜之助，広島英語学校：山田一郎，愛知英語学校：坪内逍遙，三宅雪嶺，新潟英語学校：岡山兼吉）。

学校の統廃合が頻繁でカリキュラムも猫の目のように変わる時代であった。中等教育から高等教育への連接システムも未整備であったが，彼らは，漢学ではなく英語力を基礎にした洋学において優秀な成績を修めることで，大学へ勝ち上がり「書生界の上流」を占めるに至っている。後世の我々は，当時の東京大学学生がまだまだ先行者利益を享受できた世代であり，その後の人生において「郷里の生んだ偉人・先達」といった立志伝中の人物となる候補生であったことを知っている[注7]。明治10～19年卒業生までの世代でその後のエリート到達率を測った麻生（1991，125頁）によれば，東京大学卒業生（文科）のうち43.5％がエリートの地位に到達し，慶応の19.7％に比して群を抜くばかりではなくビッグエリートへの到達率が高い（32.0％vs 4.6％）からである。彼らが，先の「壮士」連や「放浪の学徒」たち，また「一旗組（fortune - seekers）」と一線を画している点は，その経歴の相違と共に，言語能力や教養に基づくハビトゥスの相違においてであったのである。

4.　「グウド・プレイン（吉・原）」で「プレイ（放蕩）」する「書生」たち

では，漢学教育が等閑にされ，学校では外国人から英語や英文学を学び，私生活では江戸戯作に耽溺する，このような少年時代を過ごしたインテリたちの増殖は，社会にどのような影響を及ぼしたのだろうか。次に，戯作文芸の果

たした積極的な機能について検討してみよう。

それは，旧時代の藩閥意識や士族/平民の身分意識に根ざす対立関係が，これら戯作と江戸遊楽への共通のコミットによって解消されていったことだろう。武士の子弟に戯作文芸の組み合わせは意外な感がするが，この点について，前田愛は，幼年時代から漢籍による儒教倫理の教育を受けてきた明治の書生にとって，人情本の耽読は，妖しい毒を含んだ未知な情緒の世界を開かせた，と指摘する（前田，2004，231-241頁）。正統な漢学からのズレとしての戯作文芸の耽読，というスタイルは，漢学文化に対する“かな”文化という対立図式ではなく，彼らの心像にこれらの相互補完的な関係が新たに築かれようとしていたことを物語る。貢進生世代（明治3～4年）の気質と異なる点である。貢進生世代は，「名は学生であるけれども，所謂諸藩の有志と云ふやうな風が多」く，学生間の交際も「他藩人に接する態度」で行われていた（『江木千之翁経歴談』）。「某藩貢進生と焼印をした札を脇差の柄にぶらさげ」（高橋 1918，111-112頁）ていた彼らは，したがって一旦，他藩人と争事でもあれば自藩人として一歩も仮借せぬという構えが，喧嘩の種となり，また，「吝嗇」（けち）や「諂諛」（へつらい），併せて「リンテン」という些細な理由が鉄拳のきっかけとなった。

ところが『書生気質』の学生たちには［桐山］以外に腕力を誇る者はおらず，また描写される「気質」の類型は個性レベルの差異であって，旧藩意識や出身地に起因する対立関係はみられない。象徴的なものは言葉遣いで，“お国訛”は影をひそめている。「倉瀬」は，越後新潟の出身であるが，すでに7～8年の東京暮らしで故郷の方言はおおかた出なくなっている。［須河］の「オイ小町田怪しいぞ。あの芸妓を君は知つちよるのか」とか「ヤ日輪がもう沈むと見えるワイ。去なう去なう」の表現について，作者は，「こは何処の方言と定まりたるものにあらず。書生社会に行はるゝ駁雑なる轉訛方言と思ふべし」と注釈し，また上方出身でありながら土佐訛を真似する学生もいるとして，会話から地方性が消失している。

また，学生独特の隠語が多用され，そのほとんどが“色”と“金”に関する表現であることに注目したい。例えば，「プレイ」は「遊郭などへ行くことをいふ書生の通語なり」，「プロ」はprostitute（売春婦）で，娼妓の意，「僕の敵娼の娼妓」とか「娼は不在か」と使われる。「チイ・ハウス」はtea houseで引手茶屋，「吉原」が「グウド・プレイン」と呼ばれるのは，「吉：good」+「原：plain」だからである。このほか，「キャット」は「芸妓」，「プレイ」は「放蕩」の意。そして「いろ」には「ラブ」のフリガナが付けられ，恋人･情人を指している。また，「エム」は「貨幣」「金銭」，「君すこしエム（マネイの略にて貨幣といふ事）を持つては居まいかネ」と使われ，借金は「負債」（debt）や「外債」と専門用語で表現される。「七へ典した」とは，質に入れたの意，「圓助」は1円の意である。これらに比して，学校生活や学業成績に関する隠語は意外に少なく，「ヂス」=dismissで退校の意，くらいであろうか。現代の東大生の隠語の多くが，「大仏」（仏よりも更に成績評価が甘い教員），「ウィンブルドン」（成績が全て優。全優→全A→全英オープンテニス→ウィンブルドン），「カフカ」（成績が可と不可ばかり）の例のように学業成績に関するものであるのとは対照的である

（「東大用語集@はてな」
http://todai.g.hatena.ne.jp/keywordword/隠語//）。

すると，前節でみた西洋文学の引用や英語イディオムの多用が，学生たちのコミュニケーション回路を外部に閉じることで内部の凝集性を高めたのと同様に，隠語を使い，風流を愛で，“酔狂の虫”となることも，同様な機能を果たしていたと考えてよいだろう。

［守山］が友人3人と出かけた梅見の「散歩」をみてみよう。本郷から歩を東へ進め，亀戸天神へ，直線距離でおよそ6キロ，徒歩で1時間半の行程。ここから「臥竜梅」で有名な梅屋敷，さらに向島から隅田川をぐるりと奥山まで回遊している。奥山は，浅草観音本堂の北，大道芸と見世物小屋の並ぶ慰楽空間である。ここの茶屋に一行が入ったのは夕暮れ時，「此三人の友人といふのは，頗る洒落者の放蕩家だから，是ぎりで還るのも残念だ。直に吉原へ，行かうぢやアないかといひだしたのサ」。彼は，友人たちに無理矢理引っぱられ「思はず車にのつかつたとは表向で，実はいつて見ようといふ，野心が内々はあつたのサ」と告白する。花見や梅見にことよせて吉原へ行くことは，「高声で花見花見とさそうなり」や「臥竜梅見て妙計をたくむなり」などの狂歌が物語るように，江戸期の男たちの常套手段であり，［守山］たちの「散歩」は，互いにこの習慣を諒解した上での計画だったのだ。

作品はこのように，“花のお江戸”の四季の魅力を満載し，江戸通人の風流と色恋を教示するガイドブック的趣向を帯びている。この趣向は，上京を志す地方の若者たちに対し，“憧れ”という，立身出世とは異なる学生生活の魅力を提示したことだろう。『東京遊学案内』(注8) ならぬ“江戸遊楽案内”としての機能である。竹内（1978，53頁）は，若者を地方から東京へ駆り立てた地理的移動の原動力として，高い文化，消費生活への憧れである「都鄙雅俗」（柳田国男）の感覚を指摘しているが，同作品にも，上京青年たちがこの“憧れ”の感覚を共有し，遊楽空間を遍歴しながら絆を結んでいく様子が描かれている。坪内のようなマージナルな出自 (注9) と経歴をもった書き手であってこそ描けたのかもしれない。

5. オルタナティブ（alternative）な学生像として

では最後に，作者は，このような「書生」たちの連帯の形式を描くことで，暗に何を表明しようとしたのだろうか，考察しておこう。

［守山］が［小町田］の最近のおかしな様子を心配して語りかける台詞をみてみよう。「君と僕とは，どういふ因縁が有のかしらぬが，初めて学校で逢つた時から，互に親く交際をして，恰度今年で二年ばかり，陰陽なしに情誼を尽して，さながら兄弟の様にしてきた事だが」，「アヂソンも已にいつたぢやないか，信友と信友との話は肚を語るだと。」この会話にみられるのは，族籍や出身地域の違いを乗り越え，郷党意識から自由になった学歴エリートの連帯である。貢進生世代の気質や地方性は希釈され，エリートとして共通のハビトゥスをもつ新しい「学生」像の萌芽が示されている。この学生像は，「重要な他者（significant other）」が旧藩や同郷集団というよりも，「同輩集団（peer group）」のウェイトが大きい点で，従来とは異なる新しいタイプである。

当時のメインストリームな集団は，旧藩との繋がりの強い「庇護型移動」によってエリート路線に乗っていくタイプの学生たちだった。そこでは，学生相互の連帯は儒学の教養と結合した武士的エートスによって保証されていたが，『書生気質』にはこれとは別のタイプの連帯の仕方がみられる。坪内は，江戸や西洋の文芸世界に浸かり，これを共通の土壌として連帯していくオルタナティブ（alternative）な学生像を描いたのである。

とはいえ，彼らは欠点だらけの人間でもある。［須河］は，腕力党＝男色と放蕩連＝女色の間に揺れ，その間を取り持ち行き来する「内股膏薬の主義」をとってしまう滑稽な人間であるし，［小町田］は「志を立ててto be something（有為の人たらん）と盟」うが，芸妓［田の次］との恋愛では意志薄弱で，友人たちの反応に敏感である人間である。彼らの前時代的な習慣に由来する欠点と滑稽さ―遊郭通い，見栄っ張り，金遣いの荒さ，その結果としての借金苦―も驚くばかりである。それでもなお彼らは，戯作文芸の誘う江戸通人の世界に足を踏み入れ，風流に戯れ，恋愛への欲求を共有し，情報や秘密の交換を通して互いの友情の絆を深めていったのである。

彼らのために一言弁解しておく必要があるだろう。学生と江戸遊楽空間がかくもたやすく結びついた背景である。それは，学生生活の楽しみが学内や寄宿舎にはなかったからである。ようやく公的なサークルとして「演説の組合」として「共和會」などが作られようとしていたにすぎない（高田早苗『半峰昔ばなし』）。物語でも，学校内での楽しみや交流は描かれない。学校は，“門”と“耳”（「学校の門」，「門限」，「校長の耳」）の比喩に示されるように，行動を束縛する施設として表象されている。学生の溜まり場は，冬の寄宿舎の「小使部屋の暖炉廻り」（高田）ぐらいで，でなければ学外の店舗であった。高田や坪内が任意のサークルとして作った文学専修會の活動の場は天麩羅屋であった。岡倉天心が坪内や高田と交流するようになったのは，牛肉屋で英文学を語っていたのを互いに見聞きしたことがきっかけだった。彼らは，引き延ばされたモラトリアムの期間を埋め合わせるための刺激や楽しみを欲していたが，この欲求に応えるだけの自治組織は未だ貧弱であった。

一方，明治十年代は，書生と遊郭との親密な関係が問題視され始める時代である。「女通ひせぬのが変物と見え」（三宅雪嶺『自分を語る』），忘年会などで落語好きが婦人服を身につけ茶番で賑わった時代は，その短い全盛期を終え，これに反対する「硬派」が出現しようとしていた。学生の恋愛の是非を巡って個人レベルの議論を超えて「事が組織立つて来」ようとしていた。「若干の学生が遊郭に通ふといふので，これを処分せねばならぬといふ運動が起り」，「大講義室」で演説が行われたのは同世代の東京大学在学中のことである（三宅雪嶺『大学今昔譚』）。出身地や旧藩に代わる“磊落派”と“謹直派”という新たな主義・感情の対立問題を抱えながら，学生たちは，学生生活に別の楽しみや意味を模索しなくてはならなくなったのである。

明治二十年代に流行する“同郷会型寄宿舎”が，単に宿泊施設としてのみならず，「懇親会」の開催や雑誌発行を行い，意図的に同郷人の関係を構築し絆を強める機能を持たせようとしたのは，学生たちの欲求に応えるひとつの解決策ではあった。その最も早い時期のものが旧加賀藩の「久徴館」である[注10]。

このタイプの寄宿舎は，同郷集団に所属することによって立身出世を水路付けしようとする復古的な野心の表れであった。そこでは，父兄宛に，軽操浮薄の風に染まり放蕩遊逸する弊害を未然に防ぎ，志を貫くことを保証することが宣伝文句となった。牛肉店や寄席は，遊怠放逸する学生の溜まり場と見なされ，私塾の寄宿舎や下宿屋は，「屋舎矯陋ニ屋室穢雑」（土岐儻「久徴館沿革」『久徴館同窓会雑誌』第2号）としてその害が説かれることになる。

このように，一方では，坪内が作品の中で夢想した学生の連帯の形は別の方向へ，すなわち，「故郷」の記憶を絆やアイデンティティとする若者たち（成田　1998，28頁）が「再」登場しようとしていた。坪内の住居が，明治20年になって旧松山藩「常盤会」の寄宿舎として建てかえられ，そこへ正岡子規が入舎するのは皮肉な出来事かもしれない。

6. おわりに

『当世書生気質』の「ロー（羅）マンス」の世界は，「文

学士」+「春廼舎朧」の取り合わせの妙の成果として，あらゆる意味で境界性の産物でもあった。そこには，「極楽トンボ」で風流と遊楽の空間を彷徨い，諧謔の世界を楽しむ学生たちの姿が，いささか戯画的に描かれているとはいえ，あるいは現実生活で取り結んでいた重層的な関係が半ば意図的に伏せられているとはいえ，学歴エリートとしての「同輩集団（peer group）」の絆を取り結んでいこうとするオルタナティブ（alternative）な学生像が示されていた。

その学生像は，交友関係を通して己の世界の殻から脱し，可能性を広げていこうとする精神をもっている反面，彼我との軋轢やジレンマに悩む弱い人間でもある。作品の背景が，文明開化の慌ただしい世間を叙述しながらも，見通しのきかない路地裏や田舎道のセピア色の風景を前景として際立たせていたのは，このようなオルタナティブな学生像の行方を彼らが模索し葛藤する心象風景を映し出していたからであった。

現代の我々がこの作品に親近感を抱いてしまうのは，彼らの抱える漠然とした不安や軋轢に共感し，噂に流されやすかったり，同輩からの承認に敏感だったりする姿に，自分を重ねることができるからであるかもしれない。作品は，坪内逍遙や高田早苗を中心とする同輩集団の“開き直り”の表明であったようにも読めるのである。

注

(1) 時代設定は，「18年当時より三四年前，明治十五年前後」（柳田泉「解題」岩波文庫版『当世書生気質』）であり，坪内の東京大学在学時（明治11年～明治16年）の体験を踏まえているといわれる。

(2) 物価指数で約9000倍と計算した。根拠は，明治初年から昭和45年までは米価の変動をもとに（森永卓郎監修，2008，『物価の文化史事典』展望社，28-30頁），昭和45年から平成19年までは消費者物価指数をもとにした。これで換算すると，例えば，「しる粉1杯3銭」（明治10年）=270円となる。

(3) 橋本毅彦・栗山茂久　2001『遅刻の誕生』三元社，285頁，表3による。

(4) 例えば，［継原］を評して「多血神経質の人間といふべし」とは，ヒポクラテスの気質分類論。上野戦争で生き別れとなった娘が夢に出たことを話す［守山の父］は，「倅は頗に笑ひまして，心理学上から考へても，夢のしらせなぞいふ事は，あるべき筈の訳でない」（299頁）と語る。「夢のしらせ」や「正夢」はあるのかという議論に，「神経の迷」，「連感といふ心の作用」，あるいは「脳病」，などの用語が使われるのは，井上哲次郎が明治15年（1882年）に刊行した訳書『倍因氏心理新説』の影響だろうか。また，「実に日本人のアンパンクチュアル（時間を違へる事をいふ）なのには恐れるヨ」と［倉瀬］が憤り，［守山］が［倉瀬］の書いた父親への借金依頼の手紙を読んで「なぜ日本人は，斯様に自立独行の志操が乏しいだろう」と嘆く。

(5) 深谷（1969，92-93頁）による『東京府開学明細書』（1873年1月，東京都都政史料館編集）の分析。

(6) 東京大学の日本語による授業は，1883（明治16）年4月の決定まで待つことになる。

(7) 統計上はあまり意味がないかもしれないが，井上（2005）において，1876（明治9）年までの出生世代を対象に，「郷里の生んだ偉人・先達」などの文言で紹介されている人物を取り上げ，彼らのプロフィールを分析した。するとその多くが，「放浪の学徒」というよりも，旧藩や県の学校組織で才能を見いだされ，制度的に東京の高等教育機関へのルートを歩んできた者であることが明らかになった（井上2005，12-15頁および29-39頁）。

(8) 『東京遊学案内』（少年園編）は明治23年から発行された学校案内である。

(9) 坪内は，1859（安政6）年，美濃国加茂郡の生まれ。父は尾張藩代官所付手代，母は酒造業の出であるというから身分的には武家奉公人というマージナルな出自であることに注意したい。彼は，自ら「田舎育ちの癖に」「江戸趣味崇拝者」と自嘲するように，母の影響で戯作文芸の趣味に幼い頃より親しみ，寄席芸や歌舞伎など江戸風流人に対する憧れを強くもっていた。

(10) 同館は，明治15年，土岐儁や北條時敬など県からの留学生8名が集い，「人材養成ノ目的ヲ以テ一社ヲ起サンコトヲ議シ」て興された結社がそのはじまりである。明治18年，加越能育英社（明治12年に創設された日本で最古の育英事業団体）に吸収され入館者を増やしながら加越能郷友会として発展していく。

参考文献

井上好人，2002，「書生風俗と身体」竹内洋・稲垣恭子編著『不良・ヒーロー・左傾』人文書院。

井上好人，2005，『近代日本における地方名士の形成―北陸地方の中等教育からみた社会移動分析―』平成15～16年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書）

木村直恵，1998，『＜青年＞の誕生』新曜社。

正井泰夫，2000，『江戸・東京の地図と景観』古今書院。

成田龍一，1998，『「故郷」という物語』吉川弘文館。

高橋淡水，1918，『青年学生史』眞文社。

竹内洋，1978，『日本人の出世観』学文社。

寺崎昌男，1972，「帝国大学形成期の大学観」野間教育研究所紀要第27集『学校観の史的研究』野間教育研究所，183-265頁。